

美術愛好家としての高田早苗

宮 田 悠 衣

はじめに

會津八一記念博物館は、現在2号館と呼ばれる建物の中にある。この建物は、大正14年（1925）に今井兼次（1895-1987）の設計により大学の図書館として建造された。そして、その中央階段正面にある壁画《明暗》は、日本画家横山大観（1868-1958）と下村観山（1873-1930）による合作である。当時の早稲田大学総長である高田早苗（1860-1938）が「長い間親密な御交際をして居る」^{（註1）}大観、観山に制作を依頼したものである。《明暗》に関連する資料は既に当館の紀要でも紹介されており^{（註2）}、本作の制作由来については広く知られている。また、当館所蔵の前田青邨筆《羅馬使節》も、同じく高田の働きかけによって早稲田大学の所蔵となった可能性について指摘されている^{（註3）}。

高田は、早稲田大学育ての親として知られているが、その活動は極めて幅広かった^{（註4）}。政治家、文芸批評家、ジャーナリスト、起業家として各界で活躍していた高田が、当時名を馳せた芸術家たちと交流していたのはごく自然なことのようにも思える。しかしながら、本稿では改めてこの高田と芸術家たちとの交流の一端について、管見の限り資料を紹介し、僅かながら私見を述べてみたいと思う。

1. 「画宝会」と、美術家たちとの交流のはじまりについて

高田早苗が芸術家たちと交流を持つ端緒となったのは、川越出身の日本画家橋本雅邦（1835-1908）の後援会「画宝会」への参加であるとされている^{（註5）}。高田は明治23年（1890）に第1回衆議院議員総選挙に埼玉2区から立候補、当選している。黒須博吉^{（註6）}などの川越の有力者たちが、地方演説で度々埼玉県を訪れた高田に同地区からの立候補を求めたという。高田の自叙伝である『半峰昔ばなし』（高田早苗述／薄田貞敬編、早稲田大學出版部、1927年）の「雅邦會の事」には、この様にして川越町の人々と交流が深まる中で同会への入会をすすめられたと記されている。

さて、高田の入会について触れている文献はもう一つある。添田達嶺^{（註7）}が記した「逝ける高田早苗博士」（『塔影』15巻-1号、塔影社、1939年、40-41頁）である。この記事は、美術雑誌『塔影』に前年に亡くなった高田を追悼するため寄せられたものである。高田が当時の美術界においてどのような立ち位置にいたのか、端的に示す資料だと思われるため、下記に全文を紹介する。

早稲田學園の出身と云ふでもなく、生前何の關係もなく、ほんの二三度お逢ひしたに過ぎない私が、かりにも高田先生を書くに云つたら、そんな大それたことはないと思ふかも知れない。尤もな話である。

併しそれは早稲田學園の創立者の一人として、又その學長総長として多年教育界に盡瘁せられた教育家としての高田先生、若しくは大隈侯幕下の有力者として初期の帝國議會に代議士として數回當選し、後貴族院議員

に勅選せられ更らに大隈内閣の文部大臣として政治方面にも貢献するところ尠くなかつた、政治家としての高田博士を語る場合のことで、さうした方面の高田博士なら、市島春城先生の如き最適任者は云はずもがな、外にも早稲田方面に少なからず適當の人がある筈だから、無論私如き者の出る幕ではないのだが、私のこゝに語らうとするのは、何處までも美術雑誌の立場に於て、美術方面にも幾分關係のあつた高田先生を、此際本誌の讀者に御知らせしやうと云ふ程度に過ぎないのだ。

私が高田先生に初めてお逢ひしたのは、先年大隈會館建設の際、早稲田大學でその資金募集の一つとして東西の美術家に作品を依頼して展観をやつた時、高田先生の親友の黒須廣吉氏を通して、早稲田大學から私に右の作品依頼方を依頼して來た時のことである。無事に展観が済んだあとで、吾々關係者一同を芝の紅葉館に招待して慰勞の宴を催した時、高田先生と坪内先生が大學側の代表者として出席して、皆々をねぎらはれたのであつたが私が高田先生と親しく談話を交はしたのはこの時が初めてであつた。その時の印象は容姿端麗、音吐朗々とでも形容すべき貴公子然とした人ではあつたが、然も極めて平民的な常識の發達した趣味の豊かな慈父のやうな親しみ深い感じであつた。

従つてその後も幾度か御訪ねして御高姿に接したいと思つてゐたが、却々その機會がなくて、たつた一度、それも先生の御都合でほんの三四十分、岡倉先生のことや雅邦會のことを拝聴して歸つたことがあつただけでその他は展覽會などで御挨拶申し上げた程度に過ぎないから、先生に就ての私の知識はどれ程もないので、甚だ貧弱を免れないのである。

それにも拘らずここに斯うした一文を綴る氣になつたのは、一つは紅葉館に於ける初對面の印象の甚だ善かつたのと、も一つ私が兄弟のやうにして二十數年来京都へ行けば必ず泊ることにして居り、其上東京方面の美術關係者を紹介して泊まつて貰つてゐる三條の大文字家が矢張り高田先生や黒須氏の定宿で、宿の主人の奥村君と高田先生とは至つて入魂な仲だから、私が大文字家へ行くと高田先生の額や書幅の前で奥村君と先生のことを物語る機會が少なくなかつたので、益々親しみを覚えて、貧弱な持ち合わせにも拘らずそれを書く氣になつたわけである。

高田先生は明治九年に、當時の開成學校後の大學豫備門に入學されたので、岡倉天心先生よりは一年の後輩だが、同じ文學部に學んだ關係で天心先生とはその頃から交際もあり、大學本科に進んでからはフェノロサ先生にも直接教授を受けたのだが、其頃の高田先生は専ら政治經濟の勉強に熱中してゐたから、美術の方面には餘り興味を持たなかつたらしい。

先生が美術に興味を持ち初めたのは、何と云つても明治三十年に初めて雅邦會が出来た時にその會員になられた關係で橋本雅邦先生と親交を結ぶやうになつてから後のことである。これは先生が直接私にさう語つてゐたから間違ひのない話である。

雅邦會は、雅邦先生が川越松平藩のお抱繪師橋本養邦の子で川越出身といふところから、川越町の人達、前に述べた黒須廣吉氏などが中心になつて出来た會で、尤も後には川越町以外の人も少なからず参加したが、大體川越町の人達が最後まで中心であつた。そして其の川越町は高田先生の選舉區であつたから、土地選出の代議士といふので、先生は黒須氏にすゝめられて雅邦會の會員になり、それが縁で雅邦先生とも親交を結ぶやうになつたのであつた。

高田先生の話では、何でも最初は毎月七圓ばかりの會費で、その七圓の會費さへ持参すれば紙本の相當努力した作品が一枚貰へた上に、藝者の御酌で晚餐の御馳走になつて歸つたもので、その時の七圓の繪が今は何百圓としてゐるのだから驚くと語つてゐた。

そして高田先生が雅邦先生と親懇になられた頃、明治三十一年の秋に岡倉先生と雅邦先生とが中心で日本美

術院が創立されたので、高田先生は更らに岡倉先生とも大學時代の舊交を復活して、日本美術院の後援者の一人となつたのであつた。

それだから高田先生は、正木直彦先生や福原鐐二郎先生などとも若い頃から懇意であつたし、後には大隈内閣の文部大臣にもなつてたとへ一時でも文展の主催者となつたのだが、實際は文展側の人達とは餘り深い交りはなく、主として院展の後援者として院展側の人達と多く懇意にされたのであつた。

だから天心先生の歿後大正三年に現在の日本美術院が再興された時も、先生は原富太郎氏と共にその評議員となつて、陰に陽に日本美術院の發展に盡力されたわけである。

のみならず雅邦先生の歿後は、黒須氏などと一緒になつて今度は觀山会といふを組織して、下村觀山氏を後援し、或時はその會員一同で江洲から京都方面へ旅行會を試みたことなどもあつた。左やうの仲だから自然大觀氏や武山氏なども懇意であつたことは言を俟たないことである。雅邦先生の遺兒といふので橋本永邦君なども相當後援されたやうに聞いてゐる。

従つて先生の美術に就ての理想は極めて自由な新しいもので、門人を教育するのに昔流儀に手本を描き興へるやり方などは甚だ嫌つてゐた。そして雅邦先生や九代目團十郎などが弟子を教育するのに、自分の型を學ばせないで常に『工夫しろ』と云つてゐたのを激賞して、藝術はさうでなければならぬと語つてゐた。

之は全く私の推察に過ぎないが、早稲田の文科から故紀淑雄氏を中心に、所謂早稲田派と稱せられる幾多の有力な美術研究家批評家を輩出したのなども、その裏目には學長として之が指導の任に當られた高田先生の功與つて大いなるものあつたのではあるまいか。

それから之はもう一度確めて見ないと確かにさうだと断言は出来ないが、今それを確かめてゐる暇がないのを遺憾に思ふのだが、何でも福原先生の歿後正木先生は後任の帝國美術院長に高田先生を推薦したのだが、先生がどうしても受けないので正木先生が就任したのだといふ話を聞いたことがあつた。

何れにしても我が國の近代美術に對しての稀なる理解者であつた先生を失つたことは、我が美術界のためにも大いなる損失であると云はねばならぬ。

さて、高田が藝術家たちとの交流をスタートさせた時期について少し考察したい。添田が記したように、画宝会への参加が端緒になつたのではないかと筆者も考えている。明治30年（1897）7月17日に画宝会の発足会が不忍池畔の長醉亭にて開かれた。その会に高田も出席し、雅邦筆《古木に鴟鴞普化僧》を受け取つたようである^(註8)。そして、翌年に発足した日本美術院において高田は名譽賛助員になっており、更に明治31年（1898）7月7日に行われた美術院の披露式にて演説を行っている^(註9)。岡倉天心とは旧知の間柄であつたこと^(註10)、そして川越での画宝会への参加が、こういったつながりを徐々に形成させていったのではないだろうか。更に大正5年（1916）に日本美術院が再度結成された際には、高田は賛助員、評議員になっている^(註11)。

また、添田が文末に記していた、高田の第四代帝國美術院長推薦に関しても少々私見を述べたい。大正13年（1924）に決定した第三代の美術院長は、高田就任の噂が広まっていたようである^(註12)。一例として「新美術院長に高田博士が有望 有力な候補者三名 世間の腹を探つてゐる當局」（『朝日新聞』朝刊、1924年8月8日、7面）を紹介したい。

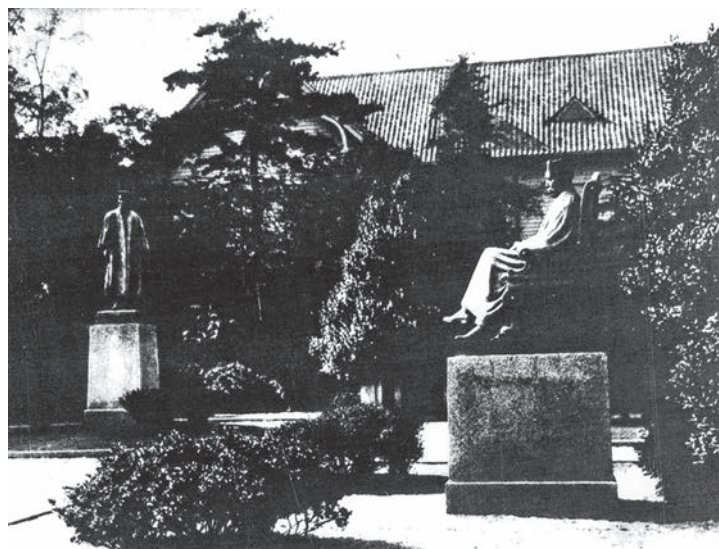
帝國美術院長の後任は帝展開會期を目の前にして、文部當局も焦慮して居るが、候補の第一人者には早大總長高田早苗博士が推されて居る様子である。高田博士といえば大隈内閣時代の文相としてばかりではなく文政界のことには最も明るい人であるし

熱心な美術愛好家であるばかりでなく、故岡倉覚藏氏等と共に陰に陽に我が美術進展のために不断の力を注いで来た人で斯界の事情にも相当通じて居る、しかも人物、貫禄總てに於て動かすべからざる強味を持ち、其上現内閣とは切つても切れぬ縁故があるとすれば博士を措いて他にそれほどの適任者を得ることは難かしからうと思はれる、一方現學習院長福原鐮二郎氏も永い間帝展審査委員長として最近の我が美術界の事情に明るいし理解もあり、人物、貫禄共にこれ亦有力な候補者に挙げられて居るらしい、平山成信男も世間の噂に上つて居る一人であるが前兩氏に比べるとそれほど有力でもなさ、うに見られる、一體文部省自身ではどんな意嚮を持つて居るのか松浦次官の話を知ると『實の處目下頗りに考慮中でまだ具體的に誰れに交渉を始めたといふまでには行つて居らぬが心の中では世間の想像や噂とそれほどかけ離れたことは考へて居らぬ、由來美術院長は學士院長などと異なり、必ずしも斯界の専門家でなければならぬといふことにはされて居らぬ院長としての立派な貫禄がありそして美術に理解を有する人といふのが推挙の標準で兼任の人でも一向差支へはない何れにしてももう近々決定發表する筈である』

以上から、前代の人事に際して高田就任の噂があったことが確認できる。『逝ける高田早苗博士』にて添田が言及した高田の第四代美術院長就任の件も、あながち間違いではなさそうである。また、これらの新聞記事において、高田が熱心な美術愛好家であったと認定されていた点も興味深い。

2. 藤井浩祐とのこと

続いて、高田早苗と交流した芸術家たちを紹介していきたい。まずは、彫刻家藤井浩祐（1882-1958）との交流について述べたい。藤井は、明治40年（1907）に東京美術学校彫刻科を卒業。その後は、太平洋画会展、文展に出品し、大正5年（1916）から再興日本美術院に参加している^(註13)。藤井と高田との交流の始まりは、現在も早稲田キャンパス広場にある《総長高田先生像》を昭和7年（1932）に制作したことによる。早稲田大学創立50周年を記念して、当時の総長であった高田の銅像を制作しようという声が上がった際に、制作者として選ばれたのが藤井であった。薄田貞敬「銅像成る」（『高田半峰片影』早稲田大學出版部、1940年、26頁）において



「中央校庭に建てられたる故大隈老侯並高田先生の銅像」『早稲田学報』（早稲田大学創立50周年記念号、1932年11月、巻頭より転載）

此の銅像建設計畫が愈々實現されて半峰の分は藤井浩祐が作る事となつた。其折り、半峰は十一回も藤井の製作所へと通ふた。大抵の人は、一二度も製作者と會見するといふのであるが、半峰は趣味家であり、又美術に造詣も深かつたからそんな大雑端な事では氣が濟まない。閑でもあつたので、能く夫人同伴で、藤井の處へ出かけたのである。

とある。また、『早稲田学報』（早稲田大学創立50周年記念号、1932年11月、79-80頁）には藤井の制作者談「氣持よく仕事を了へて」が掲載されている。下記に一部を引用するが、そこには藤井が銅像制作のために凝らした工夫のほか、高田が藤井のアトリエに度々訪れていた様子が記されている。

私がああ製作をするのに先づ興味を持つたのは、高田先生が生きてをられるといふことでした。生きてる方なら通つてもらつて思ふ存分見て製作をすることが出来ると思つたからです。御依頼を受けたのが今年の初めて日が充分といふわけではないが、製作をし兼ねるといふ程でもない。

さて高田先生にぶつつかつて見ると、今の先生の容貌姿は、どちらかといふと、幾分未だ病後の御疲れが去りきつてない様に見えたので私は、先生の元氣な姿とそして自分の見た先生の氣持といつたやうなものを、勝手に表現したい。先生も、今の私は君の言ふ通り事實疲れてゐる、僕としてもこの姿のまゝを銅像にして貰ふのは欲しない君の考へ通りに、作つてもらいたい。ですから、製作上には苦心をしたが、非常に愉快に仕事を續ける事が出来た。

銅像制作のための度々の面会は高田が一方的に望んでいたからだけではなく、藤井自身も思う存分モデルを見ながら制作を行いたかつた事によるものだったようだ。こうして度々銅像制作のために藤井のアトリエに通っているうちに、高田と藤井は親交を深めたようである。薄田の前掲書『高田半峰片影』の「雅邦の珍藏した瓜の畫など」は、藤井と大観の弟子であるとされる画家大智勝観（1882-1958）ともう一人の画家が、高田の國府津の別荘に遊びに行った話から始まる。高田と藤井は、制作を越えて親しく交流していたかもしれない。

3. 小室翠雲とのこと

高田は日本美術院に所属するものたちに留まらず、多くの芸術家たちと交流していたようである。日本画家小室翠雲（1874-1945）もその一人である。翠雲は、栃木県邑楽郡館林町（現：群馬県館林市）生まれの日本画家。田崎草雲から南画を学び、大正10年（1921）に日本南画院を創立するなど南画の復興に尽力した人物である^{註14}。

さて、高田と翠雲との交流について述べたい。まず、翠雲の画集『翠雲画譜續』（谷上隆介編、飯田呉服店美術部、1916年）の序文は、高田によるものである。続いて、翠雲による「先生と繪」『早稲田大學新聞』（125号、1938年12月7日、7面）を紹介したい。翠雲の記事が掲載された125号は同年12月3日の高田の死を知らせるものであった。翠雲以外にも高田と親交のあつた人々が、高田との思い出を語つた記事が同紙には掲載されている。翠雲は体調不良により葬儀に参列することが出来なかつたが、後日高田との思い出について取材を受けたようである。本記事の全文を下記に紹介する。

日本畫の巨匠小室翠雲畫伯は昨今病床に臥し、告別式に出席できず代理を派したが博士のため病床より心からなる冥福を祈り乍ら、博士の美術界への功績を次の如く語つた

今から約三〇年程前、高田博士は故澁澤榮一子爵外美術愛好者十四五名の人たちを會員として私のために「翠雲會」を創つてくれました、月に一度づゝ會員が相集まり私の作品を鑑賞し晚餐をともにしたのです、私は博士の繪画に對する活眼に感服してゐたものですから、自分の知遇に對して、私の作品を觀賞して戴く希望を持つて會へ出かけました、博士は非常な美術愛好者であり、獎勵家でありました

繪画の前に坐ると嚴肅として離れないで、あの温顔で繪に見入つて居たものです、そしてその場合にはすぐに意見は述べなかつたけれど、あの温厚な人が後で随分辛辣な批評をしました、私は博士の美術眼と、また博士の

私に對する奨励は非常に私の今日あるのに役立つたのを常に感謝して居ります、博士は私のためばかりでなく、翠雲會の前に下村觀山畫伯のために觀山會を組織したり、日本美術院の向上のため努力したりして畫壇への貢獻は大したものでした

4. 野沢如洋とのこと

この他、日本美術院に属さず高田早苗と交流した画家として野沢如洋（1865-1937）がいる。如洋は青森県出身の日本画家である。明治28年（1895）の第四回内国勸業博覧會にて妙技三等、日本美術協會展にて明治26-34年の間連続で入選。そして、明治40年（1907）の文展の審査員に推薦されたものの、辞退したとの話が残っている^(註15)。

さて、高田は昭和5年（1930）如洋が京都から東京へと拠点を移した際に、画名を広める手伝いをしたようである。高田早苗「野人如洋君を憶ふ」『東奥日報』（1937年10月20日）によれば

最初東京へ出て参られた時には、面識者も少く、畫いても餘り金にならぬ様子であつた。私が責任を取り大隈會館で三日間畫會を開いた事もあり其の後又、私の國府津の別宅で十日餘り如洋君を籠詰り生活にして畫いてもらつて會員を作つて之を頒つた事もある。

とある。この大隈會館の画会では、約40点の作品が展示され、その際に高田も《雪中雪之松》を購入している^(註16)。また、如洋の周囲には高田に留まらず、多数の早稲田大学関係者がいた。如洋は、「早稲田四尊」とよばれ、高田とともに草創期の早稲田を支えた市島謙吉（春城）（1860-1944）、坪内雄蔵（逍遙）（1859-1935）とも知遇を得ていたようである^(註17)。また、如洋が上京するきっかけを作ったとされる薄田斬雲（1877-1956）も早稲田大学の出身者である。斬雲は青森から上京し、早稲田大学入学後に坪内の教えを受けた。卒業後は新聞記者、伝記作家として活躍しており、如洋の伝記『豪俠畫人野沢如洋』（如洋會、1930年）、更に、先に紹介した高田の伝記『半峰昔はなし』、『高田半峰片影』を執筆している。そして、斬雲は青森県出身ということで如洋と同郷であっただけでなく、姻戚関係にあったそうである^(註18)。この他『如洋畫集』（全3巻、中山忠直、1935、1936、1938年）を監修した中山忠直も早稲田大学の出身者で^(註19)、斬雲の『豪俠畫人野沢如洋』を読み如洋のコレクターになったという^(註20)。斬雲が如洋を様々な早稲田大学関係者に紹介したつながりだろうか、当館にも如洋の《大虎之図》、《柳陰群馬之図》、《老松凌雲之図》という三点の大幅が所蔵されている。

5. おわりに

以上、高田早苗と同時代の芸術家たちに関する資料を可能な限り紹介し、わずかばかりの考察を行った。島田墨仙（1867-1943）、木村武山（1876-1942）など、高田が交流した芸術家は他にもいたようなのであるが、調査不足が否めず全てを網羅することは叶わなかった。しかしながら、高田と美術界との交流を明らかにしていくことによって、近代美術史において本学が果たした役割について再考することが出来るのではないだろうか。今後も調査研究をすすめていきたい。

註

- (1) 高田早苗「早稲田大學圖書館の大壁畫に就て」(『藝術』第5巻6号、藝術通信社、1927年2頁)
- (2) 丹尾安典・志邨匠子編「大観・観山合作《明暗》および早稲田大学旧図書館建築基礎資料集」(『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』2号、早稲田大学會津八一記念博物館、2001年)
- (3) 柏崎諒・田中純一郎「前田青邨《羅馬使節》再考—新寄贈資料の紹介をかねて—」(『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』20号、早稲田大学會津八一記念博物館、2019年)
- (4) 早稲田大学大学史資料センター『高田早苗の総合的研究』(早稲田大学大学史資料センター、2002年)
- (5) 「没後100年橋本雅邦」展(展覧会カタログ、川越市立美術館、2008年、76頁)に掲載されている『画宝会席画筆記 附起原一』(1897年)より、本会が発足時より画宝会と表記していたことが確認できるため、本文中では「画宝会」と記すこととした。
- (6) 小泉功「橋本雅邦「画宝会席画筆記 附起原一」記録について」(『埼玉史談』276号、埼玉県郷土文化会、2004年)によれば、黒須博吉は川越志義町(現：仲町)松尾呉服店の長男。川越の有力商人であり、学校建設、八十五国立銀行の創立に参加した。後に東京に移住し、画商を営んだ。とある。また、筆者は添田前掲書にて高田早苗の親友と記されている黒須廣吉と同一人物ではないかと考えている。
- (7) 添田達嶺(1888-1971)日本画家、美術評論家。著作に『日本画壇争闘史』(画報社、1924年)、『日本画の鑑賞』(雄山閣、1931年)などがある。
- (8) 註6前掲書
- (9) 「美術院披露式と竹冷の演説註釈」(『読売新聞』朝刊、1898年7月9日、4面)
- (10) 高田早苗述／薄田貞敬編『半峰昔ばなし』(早稲田大學出版部、1927年)、岡倉一雄『岡倉天心をめぐる人びと』(中央公論美術出版、1998年)
- (11) 日本美術院百年史編纂室『日本美術院百年史』4巻(日本美術院、1994年)
- (12) 「問題の人法學博士高田早苗氏」(『読売新聞』朝刊、1924年8月5日、4面)、「美術院長の後任近く決定す高田さんも色氣タップリ」(『読売新聞』朝刊、1924年8月9日、3面)も、本件についての記事である。
- (13) 「ジャパニーズ・ヴィーナス—彫刻家藤井浩祐の世界」展(展覧会カタログ、井原市立田中美術館、小平市平櫛田中彫刻美術館、2014年)
- (14) 「小室翠雲(1874-1945)館林に生まれ近代南画の大家に」展(展覧会カタログ、群馬県立館林美術館、2010年)
- (15) 森山泰太郎『野沢如洋伝』(野沢如洋顕彰会、1974年)、「野沢如洋と橋本雪蕉」展(展覧会カタログ、青森県立郷土館、1994年)
- (16) 中山忠直監『如洋畫集』1巻(中山忠直、1935年)また、この画会については註15森山前掲書に詳しい。
- (17) 市島春城「古人も及ばぬ如洋君の大手腕」(中山忠直監『如洋畫集』3巻、中山忠直、1938年)及び、註15森山前掲書
- (18) 薄田斬雲『豪俠畫人野沢如洋』(如洋會、1930年)
- (19) 志田信男「昭和初期漢方医学復興の理論家中山忠直研究ノート」(『東京薬科大学一般教育研究紀要』8号、東京薬科大学、1987年)
- (20) 横田順彌『明治ふしぎ写真館』(東京書籍、2000年)

